

# 教室における発達障害児の相互作用研究

— その現状と課題 —

吉澤 茉帆

(2009年10月6日受理)

A Review of Researches about  
Interactions of Developmental Disordered Children in Classrooms  
— Present situations and tasks —

Maho Yoshizawa

**Abstract:** This paper's purpose is to review researches about interactions of developmental disordered children in classrooms, and discuss the tasks of research. In Japan, special support education is advanced from 2003, and education for developmental disordered children became more important even in ordinary schools and ordinary classes. In preceding studies in the fields of education for disorder children and psychology, interactions are looked on one of social skills in which most developmental children are weak, and the progress of interaction is one of purposes. Recently social inclusion or inclusive education is aimed, therefore how to treat developmental disordered children in classrooms became big issues as well as how to teach each disordered children by the method fitting in each disorder. So we need to describe interactions in classrooms by ethnographical way.

**Key words:** developmental disorders, interaction, classroom

キーワード：発達障害，相互作用，教室

## 1. はじめに

本稿の目的は、日本における発達障害児の相互作用研究を概観し、その現状と課題を示すことである。

現在わが国では、特別支援教育の進展にともない、発達障害という言葉が学校に浸透しつつある。発達障害には、自閉症や高機能自閉症といった広汎性発達障害、学習障害(LD)、注意欠陥／多動性障害(AD/HD)が含まれる。医学や心理学による診断が行われ、教育の場は、特別支援学級や小学校であれば通級指導教室のほか、通常学級も制度において明確に位置付けられている。また、世界的な動向として統合教育やインクルージョンがめざされていることもあり、通常学級においても、教科指導や学級経営を進める上で、

発達障害をもつ子どもたちへの対応の必要性が高まっていると考えられる。

これまで、発達障害児への対応ということを考える際に、発達障害児の相互作用にはどのような特徴があるのかを明らかにすることがめざされてきた。それぞれの障害の特性に合ったより良い教育が模索されているのである。そのため、障害児教育や心理学の分野では、自閉症を中心に発達障害児の相互作用研究がおこなわれてきた。それらの研究では、発達障害児が他の児童や教師に働きかけたり関わったりする行動を観察・計測し、頻度や継続時間による統計的な分析によって、相互作用の実態が明らかにされてきた。明らかになった特徴や実態にもとづいて、実践的な対応が示唆されてきたのである。

しかしながら、そういった研究では、発達障害児が教室という場でどのように活動し、位置づいているかということについては、十分に検討されてこなかった。インクルージョンがめざされる今、教室において発達障害児を一員として位置づけ、教育を行うことが求められる。ダンピング（投げ込み）と言われる形だけのインクルージョンにしないために、インクルージョンがいかにあるべきかということを考えなければならない。そこで、具体的な相互作用を社会的な文脈も含めて描く研究が行われることが重要となる。相互作用を記述することによって、発達障害をめぐる問題やその背景といったよりメタレベルの問題に目を向けようとする研究がなされていかねばならない。

そこで、本稿ではまず、これまで障害児教育や心理学を中心に行われてきた発達障害児の相互作用を概観し、次に新たな視点となるエスノグラフィックな相互作用研究について論じる。最後に、それらの研究の現状をまとめ、課題について考察する。

## 2. 障害児教育における相互作用研究

日本における発達障害児の相互作用に関する研究は、主に障害児教育や心理学の分野で行われてきた。それらは、発達障害をもつ児童・生徒の行う相互作用の実態を明らかにし、その促進や改善をめざすものを中心であった。その中でも、発達障害児と健常児を中心とした他の子どもとの間の相互作用を対象としたものがまず挙げられる（金ら 2004、金・細川 2005b、廣瀬ら 2001）。一方で、子どもと大人の間で行われる相互作用を分析し、大人が発達障害児にどのようにかわればよいかということを明らかにしようとした研究もある（竹村・杉山 2002、竹村 2008、伊藤・西村 1999）。

本章ではまず、これらの発達障害児が行う相互作用の実態を分析した研究について概観していこう。

はじめに、発達障害児の相互作用について、その特徴や重要性を指摘する金・細川（2005a）の研究について述べる。次に、相互作用が行われるのが、子ども間（発達障害児－健常児、発達障害児同士）であるものと、大人（教師、臨床家）－発達障害児間であるものとの2つに分けてそれぞれ検討していく。

### (1) 発達障害児の相互作用

まず、発達障害児の相互作用については、金・細川（2005a）が論じている。金らは、「発達障害児の様々なスキルの障害を改善すること、機能的な学習スキルあるいは機能的な生活スキルを教えることが重視されてきた」先行研究に対し、「仲間との相互作用の発

達に大きな価値と重要性がある」と指摘する。その主張のもと、「自閉症児を中心とした発達障害児の社会的相互作用に関する近年の研究を、方法的・理論的視点から概観し、今後の展望について検討」している。

発達障害児における社会的相互作用の発達については、「健常児と同様に発達障害児においても、学童期に仲間から拒否されがちであると、その後の発達においても対人関係に困難を示す可能性が高い」にもかかわらず、「社会的相互作用の困難は、発達障害児の特徴の1つ」とされている。したがって、「発達障害児の仲間関係について綿密な研究を行い、改善の糸口を探すことはきわめて重要」なのである。

課題と今後の展望として、①「障害児を通常の教育環境へ、というインクルージョンの考え方が広がっている今、健常児と共に過ごせる通常学級での社会的行動を分析することが求められる」、②「社会的スキルを教えることだけに重点を置くと、社会的スキルの獲得が最終的な目標になり、社会的な関係を築くことの重要性が薄れてしまう危険性もある。また、目標として選ばれた社会的スキルは、子どもの価値観ではなく大人の側の価値観にもとづいて選択されることもしばしばある」、③「今後、発達障害児が仲間関係を築くことの困難は彼ら自身に内在する問題であるという考え方から、発達障害児と他児との間の相互作用の関数であること前提とした研究の発展が期待される」ということを主張する。

そして、「発達障害児の個々の行動を単独に生じた事象として見るのではなく、日常の場面における発達障害児と健常児双方の行動を系統的に観察し、行動がどのように相互に関係しているのかを分析する必要がある」と結論づけている。

### (2) 子ども間の相互作用

金・西永・細川（2004）は、通常学級における健常児と発達障害児の相互作用について明らかにしている。通常学級に在籍する ADD の児童 1 名と、健常児 3 名を対象とし、ポケット PC を用いて自由遊び場面の行動観察を行っている。観察に際しては、児童の働きかけ行動を「自分の活動へ誘う」「相手の活動に参加する」という大きく分けて 2 つに分類し、生起頻度や継続時間を計測する。

「相互作用」とは、2 人の子どもの、相互作用に向けられた社会志向行動（SDB: socially directed behavior；他者を見ることに伴う、または、見る直前、または直後に起こる諸行動；Mueller, & Brenner, 1977）の随伴性が 1 ターン以上ある状態」とされている。したがって、相互作用の結果として、相互作用の「あり」「なし」が設定される。「いれて」という呼びかけに「いいよ

と応えるといった「相互作用のある活動が成立する」場合は「相互作用あり」となり、「いれて」に対して「だめ」と言って去るという「相手に拒否される、または反応がない」場合は「相互作用なし」とされる。行動観察によって得られたデータは、統計的に分析され、健常児と発達障害児との相互作用の特徴を明らかにしている。

金ら（2004）と同様の関心と手法にもとづいた研究には、特殊学級での発達障害児の相互作用を分析した金・細川（2005b）がある。ただし、観察の場が特殊学級であるため、発達障害児が相互作用を行う相手に、健常児だけでなく、他の障害児や教師が含まれている。

特殊学級に在籍する障害児が相互作用を促進するひとつの方策として、交流教育がある。交流教育は、障害理解のために行われており、これまで多くの知見が蓄積されている。なかでも、廣瀬・加藤・小林（2001）は、「自閉症児と健常児との相互作用の観点からみた交流教育」という実践を行っている。自閉症児をもつ保護者の多くの期待として、「健常児集団の中で相互作用による発達の促進」があるという。そこで廣瀬らの実践研究では、「役割活動の遂行が、自閉症児と通常の学級児童との相互作用において、交流教育を促進させる教育プログラムとして機能していたか」ということが検討されている。

これらの発達障害児と健常児を中心とした他の子どもとの相互作用を対象とした研究では、相互作用が社会的スキルとしてとらえられていることが多い。したがって、他者へ働きかけることができるかできないか、ということが相互作用の有無と同義になっている。

### (3) 大人—子ども間の相互作用

発達障害児が相互作用を行う相手は子どもだけではない。教室に大きな影響を与える存在である、教師との相互作用についても見ていく必要がある。本節では、教師を中心とした大人と発達障害児との相互作用を対象とした研究について見ていこう。

まず、教室という場ではないが、発達障害児と大人との相互作用についての研究として、伊藤・西村（1999）がある。伊藤らは、大学のプレイルームにおける大人と自閉性障害児の自由遊び場面の行動観察から、「自閉性障害児との相互作用を成立させる上で重要な要因」を明らかにしている。伊藤らは、相互作用の成立を、「成立状態」「成立寸前状態」「不成立状態」の3つの水準に分け、トランスクリプトの分析を行っている。「自閉性障害児の相互作用の問題をもたらす要因」と、「相互作用を成立させるために、おとなはどのような働きかけをすればよいのか」ということが明らかにされている。

次に、教室における教師と発達障害児の相互作用を研究したものとして、竹村・杉山（2002）がある。竹村らは、児童の問題行動を「教師—児童間の相互作用の問題によって生じ、エスカレートしている可能性がある」とらえ、「教師—児童間の相互作用の分析に基づいた教師への介入を実施し、その効果を検討」している。そして、「通常学級に所属する軽度発達障害児の行動上の問題をめぐる教師—児童間の相互作用の問題について、教師側の要因に視点をおき、考察を得」ている。相互作用については、「二者関係」と捉えている。方法としては、対象とする学級の授業の観察と質問紙によって、教師—児童間の相互作用や教師の意識を調査し、問題の分析を行い、その結果に基づいて教師に「介入」を行っている。

さらに竹村（2008）は、教師の評価（＝児童の「問題行動」とそれに対する教師の対応、対応の効果を教師自身がどのように把握しているのか）を、教師—児童間相互作用に関連する要因ととらえ、「『問題行動』をめぐる相互作用について、教師への介入方略を明示する」ために、「児童とのかかわりに対する教師の評価の特徴を明らかにし、教師—児童間相互作用との関連を分析」している。その結果からは、「教師が児童の行動への対応に困難を感じている事例は、児童の行動をめぐって教師—児童間相互作用が悪循環し、『問題行動』が顕在化している可能性が高い」と結論づけている。

このような大人と発達障害児との相互作用を明らかにした研究では、大人が発達障害児の行動をいかにとらえるかということが重要な要素となっているようである。伊藤らは、発達障害児に対しておとなが適切な反応を返すことが相互作用成立水準を高める要因となり、その反応の仕方が相互作用の持続に関して大きな要因となっていると結論づけている。また、竹村らは、発達障害児（広汎性発達障害児）の攻撃的行動を問題と訴える教師に対して「介入」を行い、「両者の相互作用の改善によって」「児童の行動上の問題も改善した可能性」を指摘する。

教師などの大人のかかわり方によって、発達障害児との相互作用が変化するという結果は興味深いものである。しかし、教室においては発達障害児の「開始行動」をおとなが理解し、適切な反応をすることが難しい状況もある。適切な反応をしようとする大人の姿勢は重要であるが、実際の文脈において大人がどのようにかわり、そのかわりに対して発達障害児がどのように反応しているかということには気づかれないことが多いのではないだろうか。また、発達障害児を教室の

一員として見るならば、他の子どもに与える大人の影響についても考慮する必要があるだろう。

以上のように、障害児教育や心理学の分野を中心に行われてきたこれまでの相互作用研究は、発達障害児の相互作用の特徴を明らかにし、相互作用の改善や促進をめざすものであった。その多くは、発達障害児の相互作用について、子どもの発達を中心に据えた観察が行われる。また、相互作用は量的に計測され、分析は統計的なものであった。これらは、相互作用を促進するために、相互作用を発達障害児の発達を中心に据えて観察し、その実態を分析的に明らかにしようとする研究だと言える。

相互作用の促進をめざす研究の最大の意義は、発達障害児の対応に迫られる現在の学校に対して、有効な手立てを提供しうることである。発達障害児はどのような相互作用を行うのかという特徴が明らかにされ、そこから得られる対応についての示唆は意義深いものであろう。ただし、発達障害に限らず他の障害児教育研究でも言われている通り、同じ発達障害でも個人差があり、特徴や手立てについては必ずしも一般化できるものではないことは忘れてはならない。

さらに、先行研究では、個々の発達障害児に対してどう対応すべきかという知見は提供しうるが、教室全体において発達障害児がどのように位置づいているかということは十分に検討されていない。インクルージョンが進められていく上で、発達障害児がどのように教室で活動しているかということを検討し、インクルージョンのあり方を考えていくことが必要であるとされる。

### 3. エスノグラフィーの視座

発達障害児が教室などの社会的な場において、どのように活動しているのか、ということ相互作用の検討を通して明らかにしようとするのは、教育社会学を中心に行われているエスノグラフィックな研究である(福留 1999, 鶴田 2007・2008, 堀家 2003)。これらの研究は、子どもの発達に必要なものとして相互作用をとらえるのではなく、相互作用を詳細に記述することによって、障害児をとりまく場で何が行われているのか、何が問題となるのかということ明らかにしようとする。

#### (1) 非発達障害児を対象としたもの

エスノグラフィックな手法を用いて統合教育実践の実際を明らかにしたものとして、堀家(2003)がある。堀家は、分離教育か統合教育かという議論が、「障害

児の理想的な処遇のされ方」をめぐるの分離か統合かという理念レベルでの二元論にとどまりがちで、統合教育実践の内実を実証的に明らかにした研究はいまだ少ないという問題関心を持っている。具体的には、まず通常学級に在籍する肢体不自由児と、その子どもをとりまく人々(教師・他の子ども・介助員)について、彼が日常を過ごす学校、教室での継続的な観察を行う。観察によって、教師や生徒はその子どもをどのように処遇しているのか、彼自身は教室での活動にどのように従事しているのか、そうした営みは教室の中でいかなる教師-生徒関係の上に構築されているのかといった統合教育の現状を把握する。その上で、「教室の中での『障害児』のカテゴリー化がどのように行われるか、その子どもの『障害』がいかに生み出されるかについて描き出し」ている。調査では、小学4年生のある教室における「参加者としての観察者」としてフィールドワークと、担任教師と考察の中心的対象である児童の両親へのインタビューが行われている。分析にあたっては、象徴的相互作用論の立場に立つP・ウッズの「ストラテジー(戦略)」の概念に依拠している。「ストラテジーの概念を用いて教室の営みを分析し、『障害児』を含む教室で、相互行為(教師が行使するストラテジーと、それに対抗する子どものストラテジー等)を明らかにすることを通して、教室における『障害』がいかに生み出されるかを描き出す」のである。

鶴田(2007)は、養護学校における授業場面の分析を行っている。その問題関心は、「そもそも〈障害児であること〉とはどのようなことであるのだろうか。医学や心理学的な判定基準によってではなく、人びとのやりとりの中で〈障害児であること〉とはいかに成立しているのだろうか」ということである。障害を「実際の場面をもとに達成されるもの」ととらえ、授業の様子を撮影した映像を分析し、教師とのやりとりを通じて、知的障害児の「泣く」ことが、「障害児が泣く」と過剰に意味づけられる過程を明らかにしている。

#### (2) 発達障害児を対象としたもの

福留(1999)の研究は、発達障害のひとつである「LD」を社会的文脈においてとらえようとしている先駆的なものだと考えられる。福留は、一人の子どもを対象として、参与観察とインタビューを4年にわたって行い、「『LD』児の行動は家族にどう受け止められるのか、『LD』児は日常生活においてはどんな問題を抱えてしまうのであろうかという点」を中心に考察を行っている。「日常生活において『LD』児のいくつかの問題がその周囲の他者との関係の中でうまれてくるものではないかという仮説を検討する」ために、「家庭や学校



といった社会的相互作用の場面」に注目しているのである。

「LD」を他者との関係で生じる問題ととらえ、「『LD』児の行動が家族や周囲にどう受け止められるのか」、「子どもが『普通とは違うわたし』という意識をどう形成していくのか」という問いは、発達障害やインクルージョンを考えていく上で見過ごすことのできないものである。また、それを論じていくための福留の豊富な情報も目を見張るものがある。しかし、どのような問題が生じているのかという問題を考察しようとしているにもかかわらず、「どうすればよいか」ということに議論がいきがちである。どうすればよいかという実践的な問題解決の重要性を否定するわけではないが、具体的な場面を詳細に記述し、読み解いていくことの難しさがあると言えよう。

自閉症児の相互作用について検討しているのは鶴田(2008)である。鶴田は、療育センターにおける療育者と自閉症児のやりとりを分析している。自閉症のコミュニケーションについて、客観的に測定・評価したものに「認知・機能的な欠陥との相関関係が見いだし得る」限りにおいて、「『自閉症児の言語の問題』は客観的に実在」するとしている。しかし、自閉症児の言語の問題は、「社会的文脈があってはじめて」、「『問題』や『困難』あるいは『障害』として立ちあらわれる」。そのため、「『社会的』な場面においてはこの『問題』を(脳)機能の欠陥に還元することはできない」とする。すなわち、「能力のあり方を管理していくことは、障害児の心理学や生理学の問題である以前に、何よりもその場の参与者自身にとっての問題といえるのではないか」と鶴田は問うているのである。

このような問題関心のもと、鶴田は、療育者が許可を得る質問の仕方(～してもいいですか)を自閉症児に教えようとする場面を分析する。やりとりにおいて自閉症児は、療育者の要求に応えられないという「失敗」を繰り返す。その「失敗」に対して療育者は、「否定を通して『できなさ』をあえて強調しながら、『できる』を追求する／させるというやり方」をとる。このやり方で「できる」が追求されたのは、「発達可能性への期待が、療育という実践を成り立たせている」からだという。

堀家や鶴田の研究は、教室における発達障害児の相互作用とは言えないかもしれないが、いずれも重要な視座を与えてくれる。障害学を中心に障害の社会モデルが展開されてきたことなども関連して、「社会的文脈があってはじめて」、「『問題』や『困難』あるいは『障害』として立ちあらわれる」(鶴田 2008)という視点が必要なのである。

## 4. おわりに

### (1) まとめ

本稿では、教室における発達障害児の相互作用研究について、はじめにこれまで障害児教育や心理学の分野で行われてきたものを中心に検討してきた。それらの研究は、子ども同士や大人との間で行われる相互作用を計測し、統計的に分析することによって、発達障害児の相互作用の特徴や実態を明らかにしていた。特徴や実態を明らかにすることによって、教室における発達障害をもつ子どもへの具体的な対応についての示唆を得ることができるところで障害児教育における相互作用研究は意義深いものである。

一方のエスノグラフィックな研究は、相互作用を詳細に描くことによって、発達障害が問題となる過程を明らかにする。過程を詳細に記述することによって、発達障害そのものや、とりまく場のあり方から捉えなおすことが可能となる。インクルージョンの進展がめざされる現在の学校教育において、重要な視座を提供しうるものであると考えられる。

### (2) 今後の課題

今後の課題については、以下の3点について述べたい。

まず、対象についてである。ここで検討した研究はいずれも小学校段階を対象としたものであった。日本での発達障害児の相互作用研究では、中学校以上の学校段階に目を向けた研究がまだ十分になされていない。学校段階が上がるにつれて、子ども同士でも教師との間でも相互作用のあり方は変化する。受験や校則といった要因も、発達障害児に他者へのかかわり以上のことを求めるだろう。つまり、子どもの成長と環境の変化によって、発達障害児の相互作用も複雑となると考えられるのである。

また、幼児教育の分野においても、発達障害児の相互作用について豊富な知見が蓄積されている(園山ら 1989, 高橋 2004など)。しかし、今回は教室という場に限定したこともあり、別稿に譲りたい。

次に先の点とも関連して、本稿では紙幅の都合上、国内の研究についてのみ検討を行った。しかし、国外の研究も日本に影響を与えており、その知見は示唆に富んでいる。したがって、機会を改めて、国外における発達障害児の相互作用研究についても検討したいと考えている。

3点目の課題は、相互作用をどのようにとらえるか、ということについてである。先行研究においては、相互作用の実態を客観的に示すために、子どもの行動を細かく分類し、頻度や継続時間を計測するという方法がみられた。そのような研究の場合、働きかけとそれ

に対する応答が観察されるときに相互作用が成立した  
こととなり、拒否や無反応は相互作用が成立したこ  
とはならない。しかし、筆者には働きかけられた相手  
が「拒否」することも1つの反応であり、相互作用が  
起こっているように見えるのである。これは、中学校  
以上であればより顕著に見られることである。教室の  
なかで、授業や活動を妨げる言動をとる生徒（発達障  
害をもつ生徒の場合もある）に対して、周りの生徒も  
「反応しない」というやり方で対応することがある。教  
師もまた、そのような言動に取り合わないことで、他  
の生徒に影響を与えず教室の秩序を維持するという対  
応をとる場合がある。すなわち、学校段階や場面によ  
っては、発達障害児が他者とかかわれることだけで  
なく、状況に適切な行動をとることが必要であり、生  
じる相互作用もおおざとく多様となることが考えられ  
よう。

相互作用について、ある一定の行動を設定し、その  
成否を計測することも1つの方法であろう。しかし、  
相互作用と見なす行動が、発達障害をもたない者の基  
準で設定される場合、発達障害児の「障害児」とい  
うレッテルは強化されてしまう可能性がある。これに  
ついては、金ら（2004）が「目標として選ばれた社会的  
スキルは、子どもの価値観ではなく大人の側の価値観  
にもとづいて選択されることもしばしばある」と指摘  
することと共通する。研究を進める際には、ある基準  
をもって相互作用を設定することが、発達障害をもた  
ないものの相互作用に発達障害児を追従させること  
にもなりうるということに配慮する必要があるだろう。

教室でのやりとりをありのままに記述することは、  
一定の相互作用を設定することとは異なる。そこで生  
じていることを通じて、自明とされている教室にお  
ける規範や秩序を問い直そうとしていると言える。そ  
れによって、発達障害児を含む障害児が健常児と  
ともに学ぶインクルージョンのあり方について、具  
体的な示唆を提供できる可能性がある。相互作用に注  
目することで、インクルージョンを形だけのものや運  
動に終わらせるのではなく、進展させる一助となる  
のではないだろうか。

## 【参考文献】

伊藤恵子、西村章二 1999「自閉症障害を伴う子ども  
の相互作用成立要因に関する分析的研究」『発達障  
害研究』第20巻・第4号、pp.49-63。  
小川英彦 1992「特殊学級における子どもの相互作用  
に関する研究—学級だよりの有効的な利用をねら  
うて」『特殊教育研究』第30巻・第3号、pp.9-14。  
夏秋英房 1989「学級の相互作用研究の方法について

—言語分析の観点から—」『聖徳学園短期大学研究  
紀要』第22号、pp.121-129。  
木村祐子 2006「医療化現象としての『発達障害』—教  
育現場における解釈過程を中心に—」日本教育社会  
学会『教育社会学研究』第79集、東洋館出版社、  
pp.5-24。  
金彦志、西永堅、細川徹 2004「通常学級における健  
常児と軽度障害児との相互作用に関する研究（1）  
—ポケットPCを用いた観察方法—」『東北大学大  
学院教育学研究科研究年報』第53集・第1号、pp.357-  
370。  
金彦志、細川徹 2005a「発達障害児における社会的  
相互作用に関する研究動向—学童期の仲間関係を中  
心に—」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』  
第53集・第2号、pp.239-251。  
金彦志、細川徹 2005b「特殊学級における発達障  
害児の対人的相互作用に関する研究」『東北大学大  
学院教育学研究科研究年報』第54集・第1号、pp.295-  
304。  
佐藤百合子、佐藤晋治、加藤元繁 2002「統合保育場  
面における発達障害児と健常児との社会的相互作用  
の促進に関する研究—機能的分析の適用とこれに基  
づく介入効果の検討—」『心身障害学研究』第26号、  
pp.141-152。  
園山繁樹、秋元久美江、伊藤ミサイ 1989「幼稚園に  
おける自閉症児の発話の出現過程と社会的相互作用」  
『特殊教育研究』第27巻・第3号、pp.107-115。  
高橋千枝 2004「新入園期の仲間関係における相互作  
用内容の変化に関する研究」『東北大学大学院教育  
学研究科研究年報』第53集・第1号、pp.267-275。  
竹村洋子 2008「『問題行動』を示す児童とのかかわ  
りに対する教師の評価に関する検討」『教育心理学  
研究』第56巻・第1号、pp.44-56。  
竹村洋子・杉山雅彦 2002「通常学級において軽度発  
達障害児を担当する教師への介入—教師—児童間相  
互作用と児童とのかかわりに対する教師の認知—」、  
筑波大学心身障害学系『心身障害学研究』第26巻、  
pp.117-126。  
柘植雅義、武蔵博文、小林重雄 1992「精神遅滞児に  
おける授業分析システムの開発—TRIAD TRANSITION  
MATRIXの情報量及び位相の解析を通して—」『特  
殊教育学研究』第30巻・第1号、pp.1-11。  
鶴田真紀 2007「〈障害児であること〉の相互行為形  
式—能力の帰属をめぐる教育可能性の産出—」『教  
育社会学研究』東洋館出版社、第80集、pp.269-  
289。  
鶴田真紀 2008「自閉症児の言語獲得をめぐる相互行

- 為系列：療育実践場面の分析を通して』『教育社会学研究』東洋館出版社、第82集、pp.205-225。
- 根本橋夫 「学級における子どもと教師の相互作用に関する実証的研究の概観」『千葉大学教育学部研究紀要』第36巻・第1部、pp.25-49。
- 東俊一、杉山雅彦 1999「社会的相互作用に困難を示す幼児への治療教育的アプローチ—機能的言語行動の形成—」『新見公立短期大学紀要』第20巻、pp.25-33。
- 東俊一 2002「自発的なコミュニケーションに困難を示す自閉症児に対する指導法の検討—相互作用の連鎖に焦点を当てて」『新見公立短期大学紀要』第23巻、pp.75-83。
- 東俊一 2004「知的障害児の相互作用拡大に関する小集団指導の検討」『新見公立短期大学紀要』第25巻、pp.89-97。
- 福留晶子 1999「『LD(学習障害)』と社会的相互作用」『早稲田大学人間科学研究』第12巻・第1号、pp.57-73。
- 別府哲 1999「挑発行為を頻発した自閉症幼児における他者理解の障害と発達」『発達心理学研究』第10巻・第2号、pp.88-98。
- 堀家由妃代 2003「小学校における統合教育実践のエスノグラフィー」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第42集、pp.337-348。
- 本郷一夫 1986「相互作用場面における障害児に対する保母の働きかけの効果について」『東北大学教育学部研究年報』第34集、pp.183-201。
- (主任指導教員 山田浩之)